

ブッダの帰還

——ガンダーラにおける仏像の起源について——

藤原 達也

はじめに

仏像の起源に関する諸論考において¹⁾、最大の影響力をもつのは次の2説である。ガンダーラ（北西インド辺境、現パキスタン）起源論の代表者マーシャルは、仏像は釈尊仏陀（以下は仏陀）の生涯譚（仏伝）レリーフにおいて誕生し、仏陀の形姿が次第に巨大化、遂にレリーフを飛び出して単独像になったと主張した [Marshall 1960]。この戯画的図式の物証は皆無だが、考古学的証拠に基づく誤解した高田修の全面的賛同により [高田 1967]、我が国のガンダーラ研究の主流を形成した²⁾。同説の根本的欠陥は、ガンダーラには古代初期仏教美術（前2世紀～後1世紀初めインド本領の無仏像の仏伝レリーフ群）に類するものがなく、すでに単独像として出来上がった仏像がレリーフに嵌め込まれたかたちになっている事実を無視する点にある。

無仏像時代ガンダーラのものとされる仏伝レリーフは1点だけある（図18）。プトカラI遺跡でイタリア隊が発掘したもので、隊長ファッチェナはこれを含む約150点の出土石彫を「第1群」として前1世紀末～後1世紀初めに編年、ガンダーラ最古の仏像を含むとした [Faccenna 1974]³⁾。編年に考古学的根拠はないが⁴⁾、あると誤解したヴァン・ロハイゼン＝デ＝レーウ（以下ロハイゼン）は、「第1群」は様式的にもっと古様な一群の模倣だとし、後者が出土したマトゥラー（インド本領）こそ仏像の起源地であると言う [van Lohuizen-de Leeuw 1981]。無仏像時代マトゥラーのものとされる仏伝レリーフも1点しかなく（図10）、それは図18と同じ仏伝場面である。ロハイゼン説では後者が前者を模倣した結果であり、最初の仏像もそうであったと結論されるが、図10の考古データは実質皆無であり、図18と同様である（注4参照）。

上記2説の論拠を含め、考古編年が確実な資料は今日なお存在しない。しかし、貨幣発行年や年記という証拠により、カニシュカI世の治世に製作されたことが確実な資料群はガンダーラにもマトウラーにも存在する。我々がまずもって依拠すべき基礎資料である。クシャン王朝第4代カニシュカI世の登位年（所謂カニシュカ紀元）に関しては、それを西暦127年とするファルクに一応従うが[Falk 2001]、絶対年代は必須ではない。本稿の目標は仏像出現のメカニズムの解明だからある。

I 基礎となる資料群

製作年の確かなガンダーラ最古の資料は、クシャン朝期の首都プルシャブラ（現ペシャワール）で発行されたカニシュカI世（西暦127-150年）貨幣の図像である[Göbl, pls.XVIII, XX]⁵⁾。金貨の銘は像をBODDO「ブツダ」と呼び(図1)、同じ立像が銅貨ではSAKAMANO BOUDO「釈迦牟尼ブツダ」と呼ばれる[Cribb, 231-233; Göbl, pls.8-9, 78]。銅貨にのみ現れる装身具を着けて水瓶を持つ弥勒坐像は(図2)⁶⁾、「ボサツ（菩薩）」ではなくMĒTRAGO BOUDO「弥勒ブツダ」と呼ばれている[Cribb, 231; 234; Göbl, pl.79]。

マトウラーでは、仏陀に他ならぬ図像が「ボサツ」と呼ばれる(図3-6)。像は衣を偏袒右肩に纏い、頭頂の肉髻が*kaparda*（巻貝）に似るのでカパルダ型（カパルディン）と命名された[van Lohuizen de Leeuw 1949, 180]。像刻文の年記に基づく限りでの最古のカパルディン像は「カニシュカ（紀元）2年」（西暦129年）に造立されたが⁷⁾、次王フヴィシュカI世の治世中頃から通肩像が優勢となり、刻文から「ボサツ」の言葉も消えていく[Härtel, 659-662; Rhi, 207; 211-213]。カニシュカ治世（「23年」以下の年記）の製作が確実な像は、カパルダ型に通肩型1点を加えて計16点ある。李柱亨は、両型43点のクシャン時代マトウラー単独像を、カニシュカ紀元の年記を刻むもの（Table A）と無刻か判読不能のもの（Table B）に分けて列挙しており[Rhi, 211-213]、以下はRhi, A-xx等として参照を示す⁸⁾。上記16点中で頭部まで残存するのは立像・坐像2点ずつしかない。サルナート出土立像(図3)[Rhi, A-2]、祇園精舎出土立像(図4)[Rhi, B-5]、出土遺跡不詳の坐像(図5)[Rhi, A-3=4]、カトラー出土坐像(図6)

[Rhi, B-3] である。

カニシュカ貨幣の仏像(図1)とカパルディン立像(図3-4)は似ている。図3-4は右手を欠くが、腕の残部や他資料より⁹⁾、カパルディン立像の右手も図1と同じく施無畏印であったのは確かである。しかし、通肩と偏袒右肩の他にも看過できない違いがある。前者は左腕を鋭角に曲げて手で衣を掴み上げるが(図1)、後者は腕を鈍角に曲げて手を腰に当て(図3-4)、衣は手に巻きつくのみである[Härtel, 669]。また、前者の両足間には何もないが、後者では必ず何かがある(後述)。カニシュカ貨幣の弥勒像(図2)とカパルディン坐像(図5-6)も全体的には似ている。両者とも右手は施無畏印、左手を膝に置き(弥勒は水瓶を握る)、台座上に結跏趺坐する。しかし、カニシュカ時代マトウラー単独坐像は皆、通肩型も含め、獅子座に坐る。図5-6の菩提樹により、獅子座は菩提座であることが判かる。ピッパラ(インドボダイジュ)特有のハート形の葉々が描かれ(図5でも光背脇に遺る)、この樹下の座は釈尊がそこでブッダとなった菩提座に違いないが、刻文群は像を *bodhisattva* 「ボサツ」と呼ぶのである(図3-6)。

II 「ボサツ」と聖遺物

この問題を等閑に付してカパルディン像を仏像として扱う既往の研究に対し[高田; Härtel]、像は成道前の釈尊を象る刻文通りの菩薩像だとの説もある[Carter; Rhi]¹⁰⁾。同説への反証は、様式的にカニシュカ以前とされる浮彫2点である[高田, 358-360]。1点は帰郷した仏陀が父と対面する場面[van Lohuizen-de Leeuw 1949, 159-160 and Text-fig.10; Czuma, 37 and Fig.8]、もう1点は帝釈窟說法場面である[Vogel 1930, 28, 94 and pl.VII; Bachhofer, xxxv and pl.104]。前者の仏陀は紛れもないカパルディン立像、後者の仏陀はカパルディン坐像に他ならない。ともに成道からずっと後の場面であり、菩薩時代の出来事では絶対でない。李はカパルディン像が偏袒右肩に纏うのは僧衣ではないと力説するが[Rhi, 214]、上記の浮彫で仏陀は同様のものを偏袒右肩に纏う。浮彫をフヴィシュカ治世中盤以降のものとし、この頃にはカパルディン像は仏像に転用されたとする反論も成立しない。通肩型像を刻文が「ボサツ」と呼ぶ例が2点あり、1点は「51年」記をもつフヴィシュカ治世中盤の像だが[Rhi, A-23; 高田, 図

版 68; Lüders, 170-171, §134]、もう 1 点は「8 年」記と奉獻者名によりカニシュカ治世初期の像に相違ない [Rhi, A-7; von Mitterwallner, pl.38] (注 8 参照)。すでに初期から通肩型像とカパルディン像は等しく「ボサツ」と呼ばれ、衣の着方が仏像と「ボサツ」を分けていたわけではなかった。実際そのような区分などなかったことは、別の 2 点により明らかである。1 点は「フヴィシュカ / 51 年」記のカパルディン立像で (ジャマールプル出土)、*bhagavataḥ Śākyamu(nisya) pratimā* 「世尊釈迦牟尼の像」だと刻文は言う [Rhi, A-22; Lüders, 64-65, §29]。アーニョール出土のカパルディン坐像は [Rhi, B-8]、様式や刻文 (年記なし) 書体からしてカニシュカ治世初期のものとされるが [高田, 333 及び図版 65]、刻文は *budhapratimā* 「ブツダ像」だと言明する [Lüders, 171-172, §135]。

ロハイゼンはインド仏教での「ボサツ」と「ブツダ」の互換性・同義性を想定して問題解決を図ったが [van Lohuizen de-Leeuw 1949, 177-179]、そのような事実はパーリ語や漢訳まで含めても仏典では一切確認できないとする李の批判には耐え得ない [Rhi, 208-209]。*Bodhisattva* 「ボサツ (菩薩)」が、成道前ないし誕生前の釈尊であれ、弥勒や観音であれ、ともかくも人や神格を指すことは仏典を繙くまでもない常識である。しかし、この常識をマトウラー刻文群に適用すると違和感が伴う。*bodhisattvo pratiṣṭhā* 「ボサツを造立」。*pratimā* 「像」を補って「菩薩 (像) を造立」となれば違和感は解消するが (塚本は全「ボサツ」刻文に関して実際そうする)、暗黙の補完を後押しする史料は皆無である。カニシュカ紀元の年記をもつ像および年記不明カパルディン像の刻文群の全てで、唯一つの例外もなく、*pratiṣṭhā* 「設置・造立する」の対象語は *bodhisattva* 「ボサツ」のみである。他方、上記ジャマールプルやアーニョール出土像のように造立対象が「ブツダ (世尊釈迦牟尼)」像である場合は、同じく唯一つの例外もなく、刻文は *pratimā* 「像」を「ブツダ」に後続させる。「弥勒」や「阿弥陀」の場合も同様で、刻文は必ず「像」を付加して造立を言う¹¹⁾。マトウラー刻文の 2 種の文言 *bodhisattvo pratiṣṭhā* 「ボサツを造立」と *buddha(sya) pratimā pratiṣṭhā* 「ブツダ (の) 像を造立」の併置が導く互換・同義の等式は 1 つ、「ボサツ」= 仏像である。「ボサツ」が指すのは、仏陀 (という人物) ではなく、仏陀の像 (という物体) なのである。マトウラー派に造形対象の主人公を指す「(釈迦牟尼) 仏陀」「弥勒」「阿弥陀」等の呼称があったのなら、それら像自

体を指す用語、我々の「聖像」「礼拝像」にあたる言葉もまた当然あったであろう。それが「ボサツ」である。

けれども、聖像は「ボサツ」の指示領域の一部であり、語用もマトウラーに限定されないと思われる。ガンダーラの奉献刻文が論拠である。ダルマラジカー遺跡 G5 堂出土の銀板刻文は [Marshall 1951, I, 256; III, pl.53-c]、最高称号をもつクシャン王への言及と旧（アゼス＝ヴィクラマ）紀元「136 年」（西暦 79 年）の年記を有し、「世尊の聖遺物」をある男性が *tanuvae bosi(dhi)satvagahami* 「自分のボサツ堂に」設置したと言う [Konow, 77]（注 31 参照）。一方マトウラーでは、図 5 の刻文が（注 8 参照）、この「ボサツ」を比丘ダルマナンディンが *svakāyaṃ cetiyā-kuṭeyam* 「自分の聖遺物堂に」造立したと言う¹²⁾。他にも「カニシュカ 16 年」と「17 年」記のある 2 点の仏坐像で [Rhi, A-8, 9]、「自分の聖遺物堂」に「ボサツ」を造立という文言が確認される [Lüders, 191-192, §157; 187-188, §150]。ガンダーラでは「聖遺物」が「ボサツ堂」に、マトウラーでは「ボサツ」が「聖遺物堂」に設置・造立された。よって、「ボサツ」＝聖像の等式は「ボサツ」＝聖遺物（チャイティヤ）のそれへと拡大する。

仏像（＝「ボサツ」）がチャイティヤであったことを示す史料は他にもある。図 5 と同じ「カニシュカ 4 年」にダルマナンディンの同僚が寄進した仏坐像の刻文は、像が僧院の *vedyām* 「祭壇に」置かれたと言い [塚本, 686, Mathurā 117]、「カニシュカ 20 年」記の仏坐像では [Rhi, A-10; Rosenfield, Fig.31]、像は *devalaye* 「神殿に」置かれたと刻文は言う [Lüders, 109-110, §73]。図 6 の係累である「カニシュカ 8 年」記の仏坐像は（注 8 参照）、*bhagavato Śakamunisya āsāne* 「世尊釈迦牟尼の座に」造立されたと刻文は言う¹³⁾。立像群に関しては（図 3-4）、刻文が像の設置地点を言う際には必ず [Rhi, A-1, 2, 6; B-5, 7]、仏陀の「経行処」が所定場所である（注 7 参照）。経行処 (*caṅkrama*) とは僧院に設けられた比丘たちの歩道だが、往時の仏陀も歩んだとされるそれら自体がチャイティヤである。仏像はそうした場所を選んで設置・造立されたのである。

刻文群には仏塔（ストウーパ）への言及は片言隻句もない。「祭壇」や「神殿」や「経行処」が仏塔でないのは明白だが、「世尊釈迦牟尼の座」もまた仏塔ではあり得ない（注 13 参照）。仏像は本来、仏塔に設置されるべきものではなかった¹⁴⁾。

III 聖遺物堂の図像群

マトウラーには仏像の主たる設置場所であった聖遺物堂を描く図像遺品がある。表面に女人像脚部の遺る欄楯柱であり [Vogel 1971, 148, J24]、裏面には聖遺物堂と菩提樹下の坐仏を描く (図 9)。坐仏はカパルディン坐像 (図 5-6) であり、直上の聖遺物堂内の仏像を意味するのかも知れない。堂内は見えないが、戸口上の破風部は彫刻で飾られ、戸口の向かって左側の壁面にも長方形の彫刻板が嵌められている。はじめに触れた図 10 は、壁面の窪みに嵌め込むよう四方が平らに整形された長方形の彫刻板であるが、そのような窪みは仏塔にはなく、聖遺物堂に設けられていた。

マトウラーの聖遺物堂の破風を実際に飾っていた石板も遺る (図 7-8 とともに石板半分のみ遺存)。これら破風図像は下層に地上を描き (図 7 では菩提樹と聖遺物堂)、上層に天界の聖遺物を描く。図 7-8 表面の聖遺物は仏鉢である。四天王が成道直後の仏陀に奉獻した鉢で、仏陀はこれで成道後初の食事を「終えると、容器を空中へ投げ上げた。宝飾あるその容器をスブラフマーという名の神々の王が受けとめた。容器はいまだブラフマローカ (梵天界) にあり、神々がそれを礼拝する」¹⁵⁾。図 8 裏面には仏髪も登場する。出家直後の釈尊が自分で切り落とした髻 (もとどり *cūlā*) であり、ターバンもろとも空中へ投げ上げられたそれを帝釈天が受けとめ、「三十三天の住処に、宝珠のもとどりの靈廟 (*Cūlāmaṇicetiya*) という名で安置した」¹⁶⁾。仏鉢や仏髪は天界の聖遺物の代表である。図 8 最下層の表面には (同裏面は剥離)、樹下で禪定する釈尊がいる。樹はピッパラ (菩提樹) ではなくジャンブーであり [Vogel 1930, 124]、釈尊はまだ郷里を出ていない。その直上のカパルディン坐像の周囲には、同じ彫刻スペースがあるのに最下層には彫られた樹葉がない。従って坐像は天界の仏陀であり、その裏面に現れる左手に水瓶を持つ弥勒も [Bacchofer, xxxv and pl.103]、同じく天界にいますと考えられる。この弥勒の形姿はカニシュカ貨幣のそれ (図 2) と合致する。

これら仏陀や弥勒と (図 8)、単独像としての仏陀 (図 5-6) や弥勒 (注 8) との大きな違いは、後者が必ず獅子座に坐ることである。菩提樹や獅子座は坐者が地上にいることを示す指標となっている。換言すれば、破風図像

での天界の仏陀や弥勒が、地上へ降りた姿がマトウラー単独坐像である。ヘルテル指摘のように [Härtel, 669]、単独坐像の台座中央の獅子は獅子座の一部ではなく (図 6)、柱上法輪と互換可能であり (図 5)、菩提樹とも可能である (「32 年」記カパルディン坐像 [Rhi, A-15; Härtel, Fig.9])。柱上法輪は図 7 破風にも現れるが、天界にあるべき由来をもたず、菩提樹は間違いなく地上のチャイティヤである。獅子は単独立像の台座 (像の両足間) にも現れるが (図 3)、他の立像では全て「蓮蕾形のもの」[高田, 324] である (図 4)。後者を仏髪と見る研究者もいるが [Härtel, 669, fn.9; Verardi, 92]、図 8 裏面のそれとは全く別物である。はっきり判かるかたちで仏鉢や仏髪がクシャン朝期マトウラー単独像群に描かれることはなく、ガンダーラ単独像群との最大の違いとなっている (後述)。

ガンダーラにおいてマトウラー破風図像に相当するものには「疑似 (false)」が冠せられて来た。「その形はヴォールト屋根をもつチャイティヤ (聖遺物) 堂の断面形に想を得たものだが」[Czuma, 189]、実際に堂の破風であったと見做せる大きさの遺品がなかったのである。ガンダーラ疑似破風 (図 13-16) は仏塔専用の彫刻部材で、かつては大塔も疑似破風を有していたという誤解も生じた [Behrendt 2004, 132-133]¹⁷⁾。疑似破風が仏塔に付いて見つかる諸例はあるが [ibid., 132, fn.60]、いずれも小型の特殊な仏塔であり (聖遺物堂内で祀られる仏塔ないし仏塔型の聖遺物容器)、それら自体が言わば疑似仏塔である。仏塔礼拝図像群で仏塔に疑似破風が描き込まれる例はない。内部空間のない仏塔に戸口や破風を擬装するからには、元になった実際の建物 (戸口と内部空間をもつ堂祠) があって、その破風が彫刻で飾られていたはずだと考えるべきである。事実それは見つかった。東京国立博物館隊がザールデリー遺跡の F/2 堂遺構内で発掘した高さ 4m 超の巨大な破風彫刻である (図 17)。F/2 が聖遺物堂であった可能性は高い¹⁸⁾。聖遺物堂はガンダーラ浮彫にしばしば登場 (図 20)、堂の屋根はドーム (ないしヴォールト) を二段重ねた独特の形状を呈する。図 20 は階段付き基台をもつ大堂を描き、戸口上の破風は屋根の下段ドームのみを切り込むが (図像ではそこに花文)、例えばタフティ = バイーに遺る中規模の堂祠群では、二段屋根ドーム (ないしヴォールト) 正面を二段とも平らに削って破風としており [ティッソ, 46-48 及び併載図版群]、その形状はザールデリー破風彫刻の全体形と吻合する (図 17)。

これら図像にも天界の聖遺物が頻出する。図 13 には仏髪、図 14 には仏鉢が現れ、両方揃う場合もある [栗田, I, no.242]。図 13 には仏鉢も現れるが (第三層)、奉獻されたばかりでまだ地上にある。天界の聖遺物は必ず最上層にあるが、大抵その直下の層には禪定印ないし施無畏印の仏陀が坐る。両方の姿の仏陀が、必ず禪定の姿が上層に位置して、連続描写される場合も多く (例えば図 14)、何か思案していた仏陀が (禪定印)、その実行を決意したかのようである (施無畏印)。更に興味深いのは、その際の後者の形姿が弥勒のそれと相同かつ互換可能であるという事実である。図 13 の仏髪直下の層において施無畏印で坐るのは、左手に水瓶を持つ弥勒である。

宮治昭は、出城場面を最下層にもつ疑似破風図像において、上層で出家の決意を固める釈尊の姿が施無畏印で水瓶を持つ弥勒坐像に置き換わっていることを看取、特定の場合に両者は互換可能だというガンダーラ図像学のキーワードを入手した [宮治, 266-267 及び図 136]。特定の場合とは、重大な意思決定がなされた際だと考えられる。天界の聖遺物の下で仏陀と置き換わる弥勒は必ず施無畏印であり、禪定印ではないからである。マトゥラー破風図像でも天界における施無畏印の仏陀と弥勒は表裏一体であり (図 8)、その際の弥勒がカニシュカ貨幣の弥勒ブツダ (図 2) と酷似することは先に述べた。弥勒は天界で重大な決意をした仏陀の相同者なのであり、弥勒も仏陀と同じ何かを決意したに相違ない。その決意こそがブツダたる証であり、カニシュカ貨幣が両者を等しくブツダと呼ぶ理由であろう。いかなる決意が彼らをブツダたらしめているかの答えは、「従三十三天降下」図像にある。

IV 「従三十三天降下」図像群

ガンダーラでは専ら (疑似) 破風を成すこの図像群において、画面中央を占めるのは天地を結ぶ階段であり、階段上には帝釈天と梵天を従えた仏陀が立つ (図 15-16)。この中央部のみ遺る石彫パネルも多く、断片ながらパネル縁が直線である [栗田, I, nos.416, 420-422]。それらは実際の破風の一部であったと思われる。一部とはザールデリー破風 (図 17) で欠失の中央部であり、元来ここに別パネルが嵌まっていたことは、一直線の残部から別パネル接合のための柄が飛び出すことで明白である。欠失パネルは 1 枚で [『ザールデリー』, 73]、130-140×30-40cm の縦長だったことになるが、1

枚の長方形ではなく数枚の正方形パネルにより施工の安全を図る例もあったはずである。はじめに触れた図 18 もそうしたパネルの 1 枚であろう。36×34cm のパネル上下には柄が、左右には柄穴が遺り、図像の中央階段にはカロシュティーの 1 文字が刻まれている [Faccenna/Taddei, 62]。文字は多数の部材を組み上げる構造物での各部材の正位置を示し、ザールデリーの場合も各部材に刻まれたカロシュティーの 1 文字が破風の復元を容易にした (図 17)。図 18 は、寸法的にザールデリーのものと同規模の破風を成していたようで、破風の上部アーチ下底に位置していたと思われる。図像には、降下する仏陀 (足跡で表現) を階段下で跪いて迎える比丘尼がいるからである (図 18)。この比丘尼は、出迎えに際して男たちの後塵を拝するのを嫌い、神通力で転輪聖王に変身、その威光をもって優先的に階段下に駆け寄ったと言う仏典もある¹⁹⁾。ザールデリー破風には (図 17)、この比丘尼の化身である転輪聖王がいる (上部アーチ下底の向かって左側)。図 16 にも馬車に乗る王がいるが、階段下に跪くのは比丘のようであり、図 15 では在家男性が跪く。

パリー仏典では比丘が比丘尼より先に出迎える²⁰⁾、といった議論は無益である。仏典によるガンダーラ図像解釈には限界があり、「従三十三天降下」に関して言えば、降下以前にまず何故に仏陀は天界に昇ったのかを図像との矛盾なく説明できる仏典は、漢訳を含む北伝には少なくともない。天界に再生している亡母に説法するためとも言われるが²¹⁾、降下以前 (画面上方) にそうした光景を描く「従三十三天降下」図像はない。描かれるのは先述の施無畏印の坐仏か、その決意の印相のまま既に座から離れて階段に立つ仏陀、あるいは両方である (図 15-16)。図 15 では決意の坐仏の上層にも台座と脚が遺るが、欠失像が禪定印を結び、決断前に思案する仏陀を象っていたのはまず間違いない。仏典はこれら仏陀の姿を説明できない。仏典との乖離が最も甚だしいのが、破風図像ではない稀な遺品である (図 19)。おそらく堂内仏塔を飾っていた浮彫であり、仏塔は時計回り礼拝が原則だから、向かって右の場面が左の場面 (階段を下りる仏陀) に先行する。先行場面で施無畏印をとるのは仏陀ではなく、左手に水瓶を持つ弥勒である。ここでもまた決意の仏陀は、弥勒 (ブツダ) と交代している。彼らブツダたちが何を決意したのかは明白である。階段の降下を、すなわち天界から地上への帰還を、決意したのである。

疑似破風図像に頻出する天界の聖遺物は（図 13-14）、「従三十三天降下」場面に限って一切現れず（図 15-19）、マトウラー派の同場面と決定的に異なる（図 10-12）。後者では階段上に必ず天界の聖遺物が描かれる（仏髪は図 10-11 と多分図 12 にも、仏鉢は図 11-12 に登場）。仏陀は天界に聖遺物を残して階段を下り、すでに地上へ着いているが（図 11-12）、この時点では衣が足に絡まぬよう左手で掴み上げる姿勢は無意味である。ガンダーラ派の同場面（図 15-16）やカニシュカ貨幣（図 1）の仏陀がどの時点で何故この姿勢をとるのかの意味を、マトウラー派は理解していない。ガンダーラ派が同場面に天界の聖遺物を描かない真意も理解されていない。聖遺物も地上に降りたのであり、天界に置き去られたわけではなかった。

V ガンダーラにおける天界の聖遺物

桑山正進によれば、4 世紀末～5 世紀初頭のガンダーラで法顕を含む少なくとも 5 人の求法僧が仏鉢を見た [桑山 1990, 43-53]。プルシャブラで見た法顕が言うには、それはクシャン以前からそこにあったと伝えられていた [長沢（訳）, 44]。仏鉢の初現は不明だが、仏像製作期のガンダーラですでに絶大な人気を博していた。仏鉢礼拝図の台座に立つ単独仏像が多数造られたのである（図 25）²²⁾。それが「従三十三天降下」図像とともに聖遺物堂を飾るとき、発せられるメッセージは明瞭である。すなわち、天界の聖遺物は仏陀と共に（仏陀によって）地上へ降りた、というメッセージである。どの像も図 25 と同様で、右手は施無畏印だが、最早その左手は衣を掴み上げはしない。階段を下りた後の仏陀の姿である。地上へもたらされた聖遺物は彼の足下にある（図 25）、天界には最早ない（図 15-18）。

仏鉢や仏髪を有した仏寺の数は限られていたはずである。それら仏寺が図 25 のような像を礼拝対象として聖遺物堂内に置いたとは思えない。実物とその図像を併置したはずはないし、限られた数の仏寺に対して像の数が多過ぎる。実物をもたない大多数の仏寺もまた、その代替として図 25 のような立像を聖遺物堂内に祀っていたとは思えない。聖遺物は堂内の高い祭壇上に置かれるが、単独立像はすでに高い台座を有するからである。そこで浮上するのは坐像だが、聖遺物図像を伴う単独像遺品は極めて少なく、仏坐像に限れば 2 点しか確認できなかった²³⁾。単独立像に数の上で相応する単独坐像

の遺品は、獅子座に坐る施無畏印の弥勒像である（図 27）。

前述のように獅子座は地上を表わし、上記 2 点の仏坐像で仏鉢が獅子座にあるのも（注 23）、立像群の仏鉢が足下の台座にあるのと同じ意味である（図 25）。そこで、弥勒坐像の獅子座だけに仏鉢等の図像がない理由を問えば（図 27）、座上の弥勒自体が地上へ降りた聖遺物だからという答しか残らないようである。弥勒＝仏鉢という仮定は、他の図像群により否定はされず、むしろ補強される。台座に弥勒礼拝図をもつ幾つかの単独仏立像である（図 26）²⁴⁾。図 25 との対照は仏鉢と弥勒の互換性を強く示唆する。また、台座図像での仏鉢は両脇に天蓋の支柱をもつ祭壇上で祀られているが（図 25）、弥勒礼拝を描く浮彫群での弥勒も同様である（図 28）。仏鉢の祭壇（図 25）との唯一の違いは、弥勒のそれが獅子座であることであり（図 28）、後者から両脇柱と天蓋を取り去れば単独の弥勒坐像となる（図 27）。それは聖遺物堂の中で、仏鉢の実物がそうされであろうように、両脇柱が支える天蓋の下で祀られたであろう。

仏鉢（等の聖遺物）＝弥勒ならば、聖像を「ボサツ」と呼んで聖遺物（チャイティヤ）としていた当時の人々は、仏鉢の代替像（図 27）を何と称して祀っていたのか。「ボサツ（の）ボサツ」ではおかしい置語となるので、やはり「ボサツ（菩薩）像）」であつたろう²⁵⁾。像が刻文をもたないガンダーラはともかく、マトゥラーの刻文に「ボサツ像」という言葉が現れない事実は、後者には天界の聖遺物の代替としての聖像（という発想）がなかったことを示唆する。そもそも、聖像で代替すべき仏鉢等の聖遺物それ自体が、マトゥラーを含むインド本領に現れることは遂になかった。

VI 仏像の誕生

聖遺物の代替としての聖像の製作はガンダーラ造像活動の第二段階である。その第一段階を知るには、従って、仏鉢等の実物を有した仏寺を考えればよい。これまで誰も目にしたことのない物体を仏陀の聖遺物として提示するのに、どのような方法があり得たのか。まず、それは地上のものであつてはならない。成道地へ巡礼すれば目にできる菩提樹等は選択肢となり得ない。残るは天界の聖遺物群である。それが地上にある説明としては、仏陀自身がもたらしたとするのが最も意味深い。むしろ重要なのは仏陀の降下であ

り、その付随現象が天界の聖遺物の降下である。

難関は次である。仏陀は涅槃に入り、(輪廻転生さえしないのだから)二度とこの世には現れない。このとき仏寺には1つの選択肢しかなかったはずである。涅槃(寂滅)と上生(往生)の交換である。仏陀は寂滅してはならず、地上にいないだけで天界に往生している、とするのである。教義的には大改変だが、仏陀の不在に変わりはなく、在家たちへの影響は僅少であつたろう。しかし、在家とても仏教徒であるからには、仏伝の知識はあつたはずである。そこで降下が問題となる。仏陀を天界におくのは容易でも、地上へ下ろすのは難しく、仏伝を大改変せず下ろす方法は1つしかない。仏陀が地上と天界を往還したのは生涯ただ一度だからである。

その晩年に仏陀は唐突に天界へ昇り、彼が忽然と消えた地上界は恐慌に陥る(『増一阿含經』:大正新脩大藏經〔以下、大正と略記〕2.706a)。昇天の経緯を北伝仏典が上手く説明できず、ガンダーラ図像解説にもなり得ないことは前述した²⁶⁾。この昇天を「涅槃の予行演習(dry-run)」と喝破したのはストロングである[Strong, 177]。実際、『増一阿含經』等の仏典は昇天と仏像の起源を関連づけており、一伝承では仏陀自身が、このとき作られた仏像が彼の涅槃の後には全ての仏像の原型になると言う(『法顕伝』[長沢(訳), 68])。ある意味これは事実である。この昇天譚の再解釈で生まれた図像群こそガンダーラ造像活動の第一段階であり、第二段階以降への原型を提供したからである。

仏陀の地上への帰還が「従三十三天降下」である。仏陀は寂滅せずという改変が、この仏伝の再解釈を可能にする。帰還は仏陀の晩年一度きりではなく再びなされた、眼前にある天界の聖遺物がその証である、と言うのである。そこで説明が必要となる。四天王が奉献した、梵天が持ち去った云々の由来解説ではない。必要なのは、何故それが今ここにあるのか、何故に仏陀は再び地上へ降ったのかの説明である。無論、仏陀が帰還を決意したからであり、その目的は衆生(ガンダーラの人々)の救済を措いて他に何があろう。帰還は果たされ、結果が眼前の聖遺物として具象化しているのなら、その原因の具象化も必要となる(図21)。これが最古の仏像だとは断定できないが、同タイプ——右手は施無畏印、左手で僧衣を掴み上げ、目を見開く——の単独像では²⁷⁾、口髭まで含めてカニシュカ貨幣の仏像(図1)と最もよく合致するのが図21である。これは、降下を決意し、足にまわりつ

かぬよう衣を掴み上げて階段に立った仏陀の姿に他ならない（図 15-16）。眼前の聖遺物の説明として他の形姿は想定し難い。聖遺物の出現は仏陀の降下の帰結なのだから、降下後の仏陀の姿をそこに併置する意味はない。降下の決断は天界でなされたのである。

図 21 は出土地不詳とされてきたが、まず確実にシクリ出土である。以前から酷似が指摘されているラホール博物館蔵の仏頭はシクリ出土であり [Ingholt, no.273]、同館蔵もう 1 点の「同一工房の作とみてよいほどの類品が」[東京国立博物館 2002a, 94]、やはりシクリ出土だと公表されている [Dar, 37, Fig.45]（図 22）。同遺跡は所謂シクリ・ストゥーパで有名だが、その聖遺物堂内での出土も判明しており [ibid., 22-24]、実際にはストゥーパではなく祭壇であった可能性が極めて高い [藤原, 95]。シクリの聖遺物堂は入口脇に祠をもち、19 世紀の発掘者がそこで見つけた「大きな偶像」は行方不明とされるが、図 21 がそれである可能性も出てくる。いずれにしても、図 21 のような像が新来の聖遺物の解説として創作・設置されたことは確かである。旧来の仏舎利や仏塔に新たな解説は必要ない。ガンダーラに天界の聖遺物が出現し、聖遺物堂に収められたそのとき、そこで、仏像は誕生したと考えられるのである。

カニシュカ貨幣の坐像は弥勒のみだが（図 2）、仏陀も同じく坐って決意を固めてから階段に立つ（図 15-16）。この天界の坐仏もまた、階段に立つ姿と同じく（図 21）、降下を決意した仏陀の姿として聖遺物の解説となり得る。例えば、図 23 は正式発掘による稀な遺品だが、出土遺跡での仏像出現期（Ⅱ期）のものと断定されている [Dani, 53-54]。

こうした単独坐像の同定は難しい。単独像は後に仏伝レリーフに嵌め込まれるようになるが、前者がどの時空の仏陀かの同定根拠は後者だからである。図 21 のような立像の同定は比較的容易である。右手は施無畏印で左手は衣を掴み上げる特異なポーズは、専ら「従三十三天降下」場面での仏陀のそれだからである。単独像として仏像が誕生した後、すぐにも必要となる仏伝場面が「従三十三天降下」であり、図 21、23 のような単独像は同場面での天界の仏陀の姿として初めてレリーフになった。しかし、仏像誕生の原理からすると、単独坐像の嵌め込み先レリーフとして別の仏伝場面も必要となる。「梵天勧請」であり、そこでの菩提座上の坐仏との弁別が問題となる。ガンダーラ派は、菩提樹を明瞭にピッパラと判かるように描かない場合

が多く、樹下の座すなわち菩提座とは言えないのである。天界の仏座上にも樹——ある仏典での樹名は *Pāricchattaka*²⁸⁾ ——があり、梵天と帝釈天を両脇に、飛天の舞うこの樹下の座に坐して施無畏印をとる仏陀の姿は、所謂シクリ・ストゥーパを飾る浮彫板にも描かれている [Ingholt, no.104]。浮彫板の描写は仏陀の口髭まで含めて図 24 と殆ど全く同じだが、図 24 は「梵天勸請」場面である。梵天が成道直後の仏陀に広く法を説くよう請い勧めたという仏伝の場面だが、ガンダーラ派では殆どの場合——勸請の要もなく——すでに仏陀は決意を固めており（施無畏印）、それでも必ず梵天に加えて帝釈天も登場、樹（図 24 でも樹種は同定不能）の両側には飛天が舞う。シクリ浮彫板と「梵天勸請」（図 24）は言わば双子であり、一方から仏陀の姿のみを抜き出すと（図 23）、天界・地上界どちらの姿なのか弁別できなくなるのである。

唯一の弁別根拠は敷草の有無である。菩提座に坐る直前の釈尊に草刈人——仏典はこの *svatikayāvasika*（吉祥草の刈人）も帝釈天の化身とする [Gnoli (ed.), I, 113] ——が施した敷草であり、図 24 や図 13（第 3 層）のように仏陀の脚と台座の隙間に多数の平行線を刻んで図示される。天界の仏座に敷草は勿論なく、布が懸かる場合が多い（図 14 第 2 層や図 16）。図 23 の台座は大破しているが、僅かに遺る座と仏陀の右膝の隙間に平行線はない。旭日様の頭光を含め、図 23 は天界の座上で決意を固めた仏陀の姿を、すなわち図 21 の直前の姿を、象っていると判断しておく。像容は似ていても敷草の確認できる単独像は [e.g. 栗田, II, nos.264, 265]、菩提座の坐仏であろう。

ガンダーラは「天界の仏陀」に加え「梵天勸請」を必要とし、両者を酷似させねばならなかった。天界の仏陀と菩提座上でブッダとなった釈尊は、誤解・誤認の余地なく同一者でなければならないからである。ブッダになるとは涅槃に入る（資格を得た）のと同義である。ブッダとならずに涅槃には入り得ず、ブッダとなって涅槃に入らなかった者もない。よって、天界の仏陀と釈尊仏陀が同一であるためには、天界での決意はすでに菩提座でもなされていなければならない。仏伝において地上への帰還に利用し得るのが「従三十三天降下」のみであったように、菩提座での決意に利用できるのは「梵天勸請」しかない。そこで梵天が勸請し、釈尊仏陀が決意したのが単に説法であったなら、天界の仏陀は存在し得なくなる。故に、ブッダとなっても敢

えて涅槃に入らず、ひとたび姿は消しても衆生救済のため再び地上へ帰還するとの決意がなされた瞬間として、「梵天勧請」と「天界の仏陀」は極力似せて造形されねばならなかったのである。両場面の図像は同時期に成立したはずであり（第二段階）、勿論それは単独像としての仏像の誕生（第一段階）より後であり、「従三十三天降下」図像の成立（第一段階の直後）にも遅れるであろう。

「梵天勧請」図像群はロハイゼンがガンダーラ仏の最古形とする諸例を含むが、偏袒右肩が必須で、図 24 のような通肩像は除外される。ロハイゼン説では、ガンダーラ最古の仏像群はマトゥラーの偏袒右肩カパルディン坐像群の模倣だからである [van Lohuizen-de Leeuw 1981]。同説の通りなら、何故ガンダーラは獅子座だけは模倣しなかったのか。マトゥラー単独坐像は必ず獅子座に坐るが（図 5-6）、ガンダーラ「梵天勧請」図像に獅子座は現れない。菩提座には元々獅子などおらず²⁹⁾、マトゥラー派は、天界の仏立像（図 21）を自派の「従三十三天降下」図像において階段下（地上）に立たせてしまったのと同様（図 11-12）、天界の仏坐像（図 23）を菩提座へ移したガンダーラ派の真意を理解しないまま表層のみを模倣したのである。カパルディン坐像の両脇侍が帝釈天でも梵天でも最早なくなっているのも（図 5-6）、皮相な模倣の結果である。偏袒右肩はスワート南部を中心とする一時期の流行に過ぎず、その一時期に属するブトカラ I 遺跡資料群を最古の仏像だとするファッチェナ説に根拠はない（注 4 参照）。曖昧な（少なくとも仏鉢や仏髪ではない）聖遺物を伴う獅子座に坐るマトゥラー単独坐像は、同様の物を台座にもつ単独立像と平行して造られており、これらマトゥラー最古の仏像群は（図 3-6）、すでに第二段階に入ったガンダーラ像群（図 24-27）の亜流である。仏像の誕生地はガンダーラであり、マトゥラーではない。

VII 新生

仏像誕生は聖遺物出現の副産物である。そうやって仏像が生まれる必要性・必然性がガンダーラにはあったが、マトゥラーにはなかった。マトゥラーには現れない聖遺物がガンダーラに現れるのは、そこがインド辺境だったからだろう。辺境を、仏陀の二重の不在と言い換えてもよい。涅槃に入っ

た（要するに死んだ）仏陀が不在なのは、ガンダーラもマトウラーも同じである。しかし、生前の仏陀もまたガンダーラには不在であった。彼の活動範囲はインド本領、主に中北部域に限られるが、そこには彼が生きた痕跡がチャイティヤとして遺された。菩提樹があり、初転法輪の地があり、大僧院には彼が歩いた跡（経行処）も遺る。マトウラー最初期の仏像は皆そうした所に造立された（注7参照）。一方ガンダーラには、厳然たる歴史的事実の帰結として、仏陀が生きていた証は何一つ遺されなかった。遺骨を取めた仏塔は仏陀の不在（涅槃・死）の証に他ならず、それさえも1世紀前半の大地震に見舞われる以前のガンダーラには数えるほどしかなかった³⁰⁾。そこへ聖遺物が出現する。天から降ったのでは勿論なく、人が創り出したのだが、既存のチャイティヤをもたぬガンダーラには創り出すより他に手はなかった。それを捏造と非難はできまい。ひとえに創出は、震災に喘ぐ人々に救済の希望を与えるためであったはずだからである。

救済は劇的なかたちでなされた。クシャンが到来し、彼らがシルクロード交易で得た莫大な富によって経済的潤いを取り戻したガンダーラでは、タキシラ地方に限っても8つの仏寺が創建された。それら仏寺には、先に別の観点から述べた仏塔と聖遺物堂の対比が、更に鮮明なコントラストで看取できる。創建時に聖遺物堂を有さなかった4寺は増広もなく早々に廃絶したようだが、有した4寺は存続、後者で最大の聖遺物堂をもつカーラワーンは大規模な増広によりタキシラ有数の寺院へと発展した³¹⁾。仏塔と聖遺物堂は死と生のコントラストを成す。涅槃に入った（死せる）仏陀と入らなかった（生ける）仏陀の対照だが、後者はただ天国にいるのではなく、人々を救うため現世へ戻って来た仏陀、言わば新生ブッダである。このブッダが新生の聖遺物と結びついて仏像は誕生した。ガンダーラを模倣したマトウラーさえも（旧在の）チャイティヤと仏像を結びつけ、それを「ボサツ」と呼んだのである。

長尾雅人の論文「菩薩は現世へ帰還する」は[Nagao 1981]、4世紀末～5世紀初めプルシャプラ生まれの兄弟学者アサンガ（無著）とヴァスバンダ（世親）の大乗論典を扱う。長尾の解題を筆者が理解した限りだが、ここでの「ボサツ」とは、すでにブッダであり涅槃に入ることができるにもかかわらず敢えてそうせず、衆生救済のため現世へ立ち帰る決意をした者を指す。そのような決意の境地は *apratīṣṭhita-nirvāṇa*（不住涅槃）と呼ばれ

る。ブッダは「ボサツ」として涅槃から現世へ帰還するのである。仏像誕生の原理と合致するが、ずっと以前にこの原理を考案したのは仏像を誕生させた者たちであり、原理の提示にも難解な大乘教理は必要ない。ガンダーラの兄弟学者は、少なくとも数世紀前から仏像とともにあった信仰・思想を、後づけ的に大乘教理として体系化したようである。筆者には、こうした大乘論典よりもセイロン島の小乗教典のほうがむしろ、仏像誕生時のガンダーラの様子を活写しているように思われる。パーリ仏典の「從三十三天降下」描写における *lokavivaraṇa* 「世界の開闢・世界のはじまり」の奇跡である³²⁾。すでにパーリ原始仏典で涅槃と同義であった *lokanta/lokanirodha* 「世界の終極・世界の止滅」³³⁾ との対照も鮮明である。世親とほぼ同時代セイロン島の大学者ブッダゴーサの『ヴィスッディ＝マツガ（清浄道論）』XII は、世尊（仏陀）が、自分で創った「造形されたブッダ (*nimmitabuddha*)」つまり仏像を天界に残し³⁴⁾、地上へと降下する様を描写する：「彼（世尊）にはあらゆるものが開けて見えた。彼は、下方は無間地獄 (*Avīci*)、上方は色究竟天 (*Akanīṭṭha*) 界に至るまでを見た。その日が世界の開闢 (*lokavivaraṇa*) であった、と言われている。人々は神々を見たとし、神々も人々を見た。そのとき人々は見上げることもなく、神々も見下ろすことはなかった。すべてのものが面と向かって互いを見た。（そこへ）世尊が、中央のルビーの階段を降りて来た。（中略）この日、世尊を見た者で、ブッダ存在（ブッダがいること：*Buddhabhāvāya*）への愛着を抱かぬ者はなかった」³⁵⁾。

震災後のガンダーラが求めたのはこのブッダであり、仏塔に骨だけ遺して「世界の終極」(涅槃) に滅したブッダではなかったであろう。弥勒も同様で、古代ガンダーラの人々が抱いたのは所謂「弥勒上生」(彼の天国へ往生する) 信仰ではなく、「弥勒下生」(彼が救世主として地上へ降下する) 信仰であったと、図像群は語っている。彼らの願いは涅槃や天国ではなく、現世での救済であった。彼らは死ではなく生を渴望していたのであり、それに応えた仏寺が新たな聖遺物と新生ブッダのイメージを創り出した。そのときが正しく、ガンダーラにとっての「世界のはじまり」ではなかったか。大震災の年を終えるに際し、筆者はそう思う。 (2011 年 12 月 30 日)

注

- 1) 菩薩像を含む起源論の大半は田辺勝美の著作群の書誌が網羅している [田辺 1986; 2006; 2007]。
- 2) マーシャル = 高田説には田辺により正当かつ徹底した批判がなされている [田辺 1986, 184–187]。
- 3) 晩年に彼は何ら論拠を示さず年代を改訂、「第1群」を後1世紀前半とした [Faccenna 2001, 139]。
- 4) 編年は大塔の再増広期 (GSt.3) に基づくとされるが、GSt.3 には前1世紀末～後3世紀の年代が与えられるのみで [Faccenna 1980, part 1, 47–75]、何故150点の石彫が全て GSt.3 最初期に属するのかの説明はない。「第1群」を含む石彫の殆どは大塔を飾る状態ではなく、遺跡全体を覆う震災による瓦礫堆積層 (第④層) で見つかり [Faccenna/Gullini, 117–119]、図18もそうである [Faccenna/Taddei, 62]。個々の石彫が倒壊したどの建物に属していたかの確定は難しいが、図18の出土地点 (CNQ 区画) に関して言えば、CNQ 内の全建物は後4世紀半ば～6世紀に編年されている [Faccenna 1980, part 2, 598–599]。
- 5) ししばばガンダーラ仏像の最古遺品とされる所謂カニシユカ舍利容器やピーマラーン舍利容器には、無条件には基礎資料とし得ない諸問題がある。前者の問題については田辺 1987 参照。後者の舍利容器と共伴出土したアゼス模刻貨の発行年代 (1世紀後半) は、容器埋納の上限を示すに過ぎず、下限ではない (『仏教美術事典』745の拙稿「ピーマラーン」参照)。
- 6) 図2右はクリブの原画に基づくが [Cribb, 234, Fig.30.3, no.8]、原画にはない頭光を加筆した。クリブは、他の諸タイプにはある頭光がこのタイプにないのは铸造時の事故だろうと言うが [ibid., 231]、ゲーブルが挙げた同タイプ標例群では部分的ながら頭光が確認できる (図2左) [Göbl, pl.79, Type 791]。
- 7) カウシャーンビーの大僧院遺跡出土の立像で、台座刻文によれば「大王カニシユカの2年に比丘尼ブッダミトラーにより世尊仏陀の経行処に造立された」 [塚本, 631, Kosam 2]。年記を「22年」と読む説もあるが [高田, 323]、同遺跡からは他に2点「比丘尼ブッダミトラーにより世尊仏陀の経行処に造立された」との刻文をもつ立像が出土しており [Sharma/Negi, 15–17]、1点の年記は判読不能、もう1点は「大王 (カニシユカ) の6年」である。比丘尼の活動期はカニシユカ治世最初期であり、活動がカニシユカ最晩年の「22年」にまで及ぶとは考え難い。彼女は、別刻文によりマトウラーの比丘バラの弟子であったと判かっており [Lüders, 54–55, §24]、バラと共同で「カニシユカ3年」サールナート (初転法輪の地) の「世尊の経行処に」巨像を造立した [塚本, 896–898, Sarnāth 4–6] (図3)。

バラが祇園精舎（サヘート遺跡）の「コーサンバクティー（仏陀が祇園滞在時に寝起きした堂の1つ）の経行処」に造立した巨像は（図4）、年記は読めないが〔塚本, 700-701, Saheth-Maheth 2-3〕、サールナート像の造立年やブッダミトラの活動期間からしてカニシュカ治世の最初期に造立されたことは確かである。

- 8) Rhi, A-3 と A-4 は同一像である。弥勒像2点（「フヴィシュカ/29年」記坐像〔Rosenfield, Fig.32; 塚本, 678, Mathurā 95〕と注11立像）および阿弥陀像（注11）は故意に李の表から外されたようである。しかし、フスマンが2点同時公刊したカパルディン坐像の内「カニシュカ4年」記の1点〔Fussman 1988, 6〕のみが挙げられ〔Rhi, A-3=4〕（図5）、もう1点は李の表から漏れた〔Fussman 1988, pls.III-V〕。それは「カニシュカ8年」に比丘シンハカの弟子ブッダラクシタが造立した像だが〔ibid., 7〕、同年にはシンハカ自身も通肩型の坐像を寄進した〔Rhi, A-7; Lüders, 167-168, §128〕。ブッダラクシタの母もまた坐像（図6）を造立したが〔Lüders, 30-31, §1〕、それは確実に「カニシュカ8年」前後であつたろう。
- 9) ゴーヴィンドナガル出土カパルディン立像〔Härtel, Fig.14; Sharma, 86 and Fig.23〕やギメ美術館蔵マトウラー欄楯柱の仏立像〔高田, 挿図122〕。
- 10) 同様の説は早くも1938年にアグラワラが唱え、ローゼンフィールドが正当な批判を加えていたが〔Rosenfield, 314, n.139〕、カーターも李もそれには触れない。
- 11) アヒッチャトラー出土の弥勒立像〔高田, 挿図173〕の台座刻文〔塚本, 543, Ahicchatrā 1〕。ゴーヴィンドナガル出土の両足のみが遺る像の台座に刻まれた「フヴィシュカ/26年」記と「阿弥陀の像を造立 (*Amitābhasya pratimā pratiṣṭhā*)」の文言〔Sharma, 142-143 and fig.53; 塚本, 666, Mathurā 79〕。
- 12) Fussman 1988, 6. 「自分の」とは、聖像の造立者自身が、それを容れる堂祠も同時あるいは事前に建立・寄進したことを意味する〔ibid., 11-12〕。
- 13) Fussman 1988, 7. 別の無年記カパルディン坐像の刻文は、この「ボサツ」が「ブッダたちの座に (*budhāna āsane*)」造立されたと言う〔von Hinüber, 31 and figs.1-2〕。フォン・ヒニーバーはこれを「世尊釈迦牟尼の座」と比較、これら「座」とは「ブッダ（像）たちのいる（ある）場所」ほどの意ではないかと言う〔ibid., 32〕。いずれにしても、過去仏たる複数のブッダたちの聖遺物群を単一の仏塔に埋納することはあり得ないので、「座」が仏塔でなかったのは確かである。
- 14) 仏舎利（遺骨）を収める仏塔は確かにチャイティヤの代表である。しかし、少なくとも初期のガンダーラやマトウラーでは、このチャイティヤに更なるチャイティヤ（仏像）を付加設置しなかったようである。『十誦律』では、仏陀に仏塔莊嚴の仕方を仔細に質問する長者が、仏陀から「菩薩侍像」造刻の許諾を得ている（大正新脩大藏経〔以下、大正と略記〕23. 352a）。李は、この「侍」を「時」の書き誤りとする説を容認、カパルディン像群は菩薩時代の釈尊像だという自説の補強材料とす

るが [Rhi, 220-221]、像群は決して仏塔には設置されなかったのであり、また、史料自体を誤りとして自説を有利に導くのは学術研究の禁断である。仏塔が「ボサツ（菩薩）」（= チャイティヤ）であったのなら、その「侍像」とは、古代インド仏塔群なら大抵どこにもあるヤクシャやヤクシーあるいは守門（dvārapāla）の像を指すと思われる。

- 15) 『ラリタヴィスタラ』 XXIV.107-108（ゴースワミの英訳よる [Goswami, 352]）。
- 16) 原文は Fausbøll (ed.), I, 65、訳は『ジャータカ全集』1, 75 による。
- 17) 同箇所でベーレントは大塔に遺る三葉形の龕が往時の疑似破風の名残りだとも言うが、あり得ない。そうした龕は仏寺各所にあり、建物外壁のみならず内壁にも設けられるからである。
- 18) ガンダーラ仏寺において聖遺物堂 (relic shrine) の占める位置と重要性については、ベーレントの詳しい研究がある [Behrendt 2006]。それによれば、聖遺物堂には単室型と（前室＋奥室の）二室型があり、単室型はしばしば像堂 (image shrine) と混同されるが、像堂は（中の像がよく見えるよう）コの字形の建物であるのに対し、聖遺物堂は聖遺物の保安上コの字の開口部が内側へ折れた形の建物となり、その入口は狭く、壁は他の建物より厚い。ザールデリー F/2 堂が正しくそうである。F/2 堂はカーラワーン A1・A13 堂やダルマラージカー H 堂と比較されているが [『ザールデリー』, 96, n.15]、前者は二室型の聖遺物堂、後者は典型的な像堂である。F/2 堂のような単室型の比較対象となるのはタレリ D6 堂や後述「シクリ・ストゥーパ」堂であり、どちらの堂も主塔周りに形成される矩形区画がそこだけ突出したような特殊な小区画に立地し、狭い入口を主塔に向かって開く [Behrendt 2006, Fig.4.5; Dar, Fig.7]。F/2 堂の建つ区画も正しくそうであり、その小区画と西接する僧院（僧房群のある区画）とは厚い壁によって隔てられ、隔壁は F/2 堂西壁と同軸上に 20m 以上確認されている。小区画の東側境界は主塔の東囲壁が北へ延長されて形成される。主塔区画の北東隅部だけが突出したようなこの小区画には、他に少なくとも 2 つ、F/2 堂より小規模な堂祠が遺るが、狭い入口を主塔に向かって開くのは F/2 堂のみである。保安機能をもつ聖遺物堂が、危急の事態や寺院の改修の際、彫刻のみならず様々な物品の一時的搬入先になるのは当然であるが、最初から「祠堂ではなくまさに保管庫そのもの」 [『ザールデリー』, 80] として建てられたわけではなかろう。
- 19) 『増一阿含経』（大正 2.707c-708a）；『根本説一切有部毘奈耶雜事』（大正 24. 347b）；『ディヴィヤ・アヴァダナ』 [平岡（訳）, 下, 130]。
- 20) 『パラマツタジヨーティカー』 IV.16: *Sopāṇakaḷevare ʾḥitam pana Bhagavantam sabbapaṭhamam ʾayasmā Sāriputto vandi, tato Uppalavaṇṇā bhikkhunī* 「そのとき階段に直立不動し、一等最初に世尊へ表敬の挨拶をしたのは尊者サーリプッタ、次が比丘尼ウッパラヴァッナー」 [Smith (ed.), 2, 570; 拙訳]。

- 21) 『ディヴィヤ・アヴァダナ』[平岡 (訳), 下, 122; 130]。『法顕伝』も[長沢 (訳), 68]。
- 22) 同様の仏像は少なくとも 21 点確認されているという[東京国立博物館 2002a, 97]。仏髪もあるが数は少ない。確実に単独像の台座であり、そこに仏髪礼拝図のある遺品は、筆者の知る限りでは 2 点である[Foucher 1905, Fig.186; Fussman 1980, Pl.VI]。
- 23) とともに獅子座の中央に仏鉢礼拝図をもつ仏坐像であり、1 点での仏陀は禪定印で黙想し[Ingholt, pl.XV-1]、もう 1 点では半眼で転法輪印を結ぶ[桑山 1990, 図版 11]。
- 24) ハンティントンはインド博物館(コルカタ)蔵の同様の単独仏立像を挙げるが、その図版写真は裏焼きである[Huntington, 149 and Fig.11]。
- 25) こうした像が『摩訶僧祇律』の「菩薩像」かも知れない(大正 22.498b.20-23): 有舍利者名塔。無舍利者名枝提。如佛生處、得道處、轉法輪處、般泥洹處、菩薩像、辟支佛窟、佛腳跡。「舍利のあるものをストウーパ(塔)と言い、ないものをチャイティヤ(枝提)と言う。(後者は)すなわち、仏の生まれた所、成道した所、初説法した所、涅槃に入った所、菩薩像、辟支仏たちの窟、仏の足跡である」。「ボサツ(菩薩)像」は、「聖遺物」の「聖像」として二重の意味でチャイティヤなのである。
- 26) ガンダーラ研究が不当に遠避けていると批判のある[Verardi, 89, fn.74] 南伝パリー仏典のほうが、ガンダーラがそこに何を見たのかの真相に近いと思う。仏陀は、過去仏たち(purimabuddhā)すなわち彼以前に成道して涅槃に入ったブッダたちが皆かつてそうしたからという理由で天界へ赴くのである(『ジャータカ』no.483 [Fausbøll (ed.), IV, 264-66; 『ジャータカ全集』6, 257-259])。
- 27) スワート地方の不詳遺跡出土の同タイプ像(スワート博物館蔵, h.72cm, 口髭なし)は、図 21 では胸部に痕跡のみ遺すところの、衣を掴んで持ち上げる左手も完全に遺すが、良好な図版を得られなかった[Khan, 21, no.4]。大英博物館蔵の出土地不詳像(h.104cm)も口髭はなく[Zwalf, I, 79-80; II, no.1]、左腕は欠失、上記図 21 胸部痕跡もないので左手が衣を掴み上げていたとは限らない。栗田, II, nos.196, 200 も同様で、ともに足と台座欠失、口髭は後者のみ。同 no.208 は左手で衣を掴み上げるが、足と台座は欠失、口髭なし。スワート像以外は全て伏目か横目かで、図 21 のように目を見開かない。最近ニモグラム遺跡出土として紹介された同タイプ像は[Luczants et al. (eds.), 237, no.184]、スワート博物館収蔵ブトカラ I 遺跡出土像と同一品であり[Khan, 23, no.6]、収蔵前は遺跡に現地保存されていた大きなレリーフの一部であって単独像ではない。
- 28) Fausbøll (ed.), IV, 265; 『ジャータカ全集』6, 259。
- 29) ガンダーラ「降魔成道」場面で菩提座の両脇に獅子が踞る浮彫があるが[Pal (ed.), 40, fig.2]、魔衆の助手的役割であり、菩提座の一部では決してない。

- 30) マーシャルが二十余年に及ぶタキシラでの発掘によって得た考古データによれば、この西暦 30 年頃に起きた大地震により野石積み (rubble masonry) の建物は全倒壊、復興事業はダイアパー (diaper) という新たな石積みで行われた [Marshall 1951, I, 63; 118]。野石積み仏塔はタキシラでは 2 箇所では確認できない。ダルマラージカー遺跡とジャンディアル A=B 遺跡である。ダルマラージカーの大塔と北接の 2 塔を分離し、後者をタルマラージカー北 (North) なる別遺跡と見る説もあるが、震災後に僧院が仏塔に付設されて仏教寺院が成立する際、ダルマラージカーでは北 2 塔の周囲にのみ付設されたのであり、もし大塔と北 2 塔が別遺跡ならば前者は遂に僧院をもたず、仏教寺院とはならなかったことになる。ジャンディアルに関しても A 塔と B 塔を分けて 2 遺跡とする見解もあるが、両塔が 100m も離れていないのに対し、ダルマラージカー北の 2 塔は互いにその 3 倍近く離れている。もし、ジャンディアルを 2 遺跡に分けるのなら、ダルマラージカー北を更に 2 つの遺跡に分けねばならない。ともかくも、大地震以前のタキシラにはこれだけの数の仏塔しかなかった。
- 31) 8 寺は初期ダイアパー (early diaper) により桑山の「タキシラ II 期」に創建されたが、内チルトープ A・C・D1・D2 の 4 寺には続く「タキシラ III 期」の石積みである後期ダイアパー (later diaper) による改修や増広を受けた形跡が全くない [桑山 1974, 329]。聖遺物堂をもたなかったこれら 4 寺は、「タキシラ II 期」中に廃絶したらしい。創建時の規模は問題ではなく、それは 8 寺中で最小のピッパラの事例で明らかである。仏塔四面を僧房群で囲むこの小寺は、それでも、寺院区画の西側に小さな聖遺物堂を 1 つもっていた。小寺は驚くべきことにタキシラ仏教文化の末期 (桑山の「タキシラ VI 期」) まで存続、その際に寺の西側半分を潰す全面改築と増広があったが、聖遺物堂だけは保全され、堂内の (おそらく) 祭壇であったものが堂内仏塔に造り直され、なおも聖遺物堂として命脈を保ったのである [Marshall 1951, I, 366]。存続した他 3 寺はチルトープ B、ギリ CDE、そしてカーラワーンである。加えて「タキシラ I 期」からのダルマラージカー (注 30 参照) も存続、その大塔の周囲に「タキシラ II 期」に付加設置されたのが聖遺物堂群に他ならず、内 G5 と番号された 1 堂からは、これを「ボサツ堂」と呼ぶ前述の銀板刻文が出土した。銀板の記す日付けの 2 年前である (アゼス = ヴィク라마紀元) 「134 年」 (西暦 77 年) の年記をもつ銅板刻文がカーラワーン寺の巨きな聖遺物堂 A1 内で出土しており、刻文は在家女性が聖遺物を「堂内仏塔 (*gahathuba* < *grhastūpa*)」に設置したと言う (Konow による解説 [Marshall 1951, I, 327])。
- 32) 例えば『ミリンダパンホー』VIII [Trenckner (ed.), 350; 中村／早島 (訳注), 3, 170] や『ジャータカ』no.483 [Fausbøll (ed.), IV, 266; 『ジャータカ全集』6, 259]。
- 33) 例えば『サンユッタ・ニカーヤ』II.3.9–10 [Feer (ed.), I, 62; 中村 (訳注), 145;

307, n.10]。

- 34) 天界の仏像に関するこの記述は、神通力ある仏弟子に伴って天界へ上った工人がそこで仏陀の形姿を見て造刻したのが最初の仏像だとする『大唐西域記』の記述と通ずるし [水谷 (訳), 186-187]、最初の仏像タイプ (図 21、23) は天界の仏陀を想定しているという本稿の結論とも通底する。
- 35) 原文は Rhys Davids (ed.), 391-392、訳は Pe, 453-455 の英訳に基づく。

参考文献

- 『祇園精舎——サヘート遺跡発掘調査報告書』(4巻) 1997、関西大学。
- 栗田功 1988-1990:『ガンダーラ美術』(I・II)、二玄社。
- 桑山正進 1974:「タキシラ佛寺の伽藍構成」『東方学報』第46冊、327-354頁。
- 1990:『カービシー＝ガンダーラ史研究』、京都大学人文科学研究所。
- 『ザールデリー：パキスタン古代仏教遺跡の発掘調査』2011、東京国立博物館。
- 『ジャータカ全集』(10巻) 1982-1991、春秋社。
- 高田修 1967:『佛像の起源』、岩波書店。
- 田辺勝美 1986:「ガンダーラの仏陀・菩薩像の起源」肥留間恒寿『犍駄邏の美』、里文出版、183-210頁。
- 1987:「カニシュカ王と所謂カニシュカ舍利容器」『佛教藝術』第173号、100-120頁。
- (編著) 1992:『平山コレクション——シルクロードのコイン』、講談社。
- 2006:『仏像の起源に学ぶ性と死』、柳原出版。
- 2007:「ガンダーラの弥勒菩薩像の起源——佛像起源論への新視点」田辺勝美 (編)『平山コレクション——ガンダーラ佛教美術』、講談社、262-280頁。
- 塚本啓祥 1996:『インド仏教碑銘の研究 I』、平楽寺書店。
- ティッソ, F. 1993:『図説ガンダーラ』(前田龍彦/佐野満里子訳)、東京美術。
- 東京国立博物館 2002a:『パキスタン・ガンダーラ彫刻展』(図録)。
- 東京国立博物館 2002b:『インド・マトゥラー彫刻展』(図録)。
- 長沢和俊 (訳注) 1988 (11刷):『法顕伝・宋雲行紀』、平凡社 (東洋文庫 194)。
- 中村元 (訳注) 1989 (3刷):『ブッダ：神々との対話』、岩波書店 (岩波文庫)。
- 中村元/早島鏡正 (訳注) 1983-1989 (15-18刷):『ミリンダ王の問い』(3巻)、平凡社 (東洋文庫 7・15・28)。
- 平岡聡 (訳注) 2007:『ブッダが謎解く三世の物語』(上・下)、大蔵出版。
- 藤原達也 2008:「ガンダーラ『仏伝図』再考——所謂シクリ・ストゥーパを主対象に」『オ

- リエント』第50巻第2号、90-119頁。
- 『仏教美術事典』2002、東京書籍。
- 水谷真成（訳）1983：『玄奘三蔵の旅——大唐西域記 1』、平凡社。
- 宮治昭 1992：『涅槃と弥勒の図像学』、吉川弘文館。
- Bacchofer, L. 1973 (1939) : *Early Indian Sculpture*, New Delhi.
- Behrendt, K. A. 2004 : *The Buddhist Architecture of Gandhāra*, Leiden/Boston.
- 2006 : “Relic Shrines of Gandhāra: A Reinterpretation of the Archaeological Evidence”, Brancaccio, P./K. Behrendt (eds.), *Gandhāran Buddhism: Archaeology, Art, Texts*, Vancouver/Toronto, pp.83-103.
- 2007 : *The Art of Gandhara in the Metropolitan Museum of Art*, New York.
- Carter, M. L. 1988 : “A Gandharan Bronze Buddha Statuette: Its Place in the Evolution of the Buddha Image in Gandhara”, P. Pal (ed.) 1988, pp.21-38.
- Cribb, J. 1984 : “The origin of the Buddha Image: the numismatic evidence”, B. Allchin (ed.) *South Asian Archaeology 1981*, Cambridge, pp.231-244.
- Czuma, S. J. 1985 : *Kushan Sculpture: Images from Early India*, Cleveland.
- Dani, A. H. 1971 : “Excavation at Andandheri”, *Ancient Pakistan*, IV, pp.33-64.
- Dar, S. R. 1999/2000 : “The Sikri sculpture”, *Silk Road Art and Archaeology*, 6, pp.19-43.
- Faccenna, D./G. Gullini 1962 : *Reports on the Campaigns 1956-1958 in Swat (Pakistan)*, Roma.
- Faccenna, D./M. Taddei 1962 : *Sculptures from the Sacred Area of Butkara I: Part 2*, Roma.
- Faccenna, D. 1974 : “Excavations of the Italian Archaeological Mission (IsMEO) in Pakistan: Some Problems of Gandharan Art and Architecture”, *Proceedings of the International Conference of the History, Archaeology and Culture of Central Asia in the Kushan Period*, I, Moskva, pp.126-176.
- 1980 : *Butkara I (Swāt, Pakistan) 1956-1962* (part 1, part 2), Roma.
- 2001 : *Il Fregio Figurato dello Stūpa Principale nell’Area Sacra Buddhista di Saidu Sharif I (Swat, Pakistan)*, Roma.
- Falk, H. 2001 : “The Yuga of Sphujiddhvaja and the Era of the Kuṣāṇas”, *Silk Road Art and Archaeology*, 7, pp.121-136.
- Fausbøll, V. (ed.) 1991-2008 (1877-1896) : *Jātaka* (6 vols.), Oxford/Lancaster.
- Feer, M. L. (ed.) 1960 (1884-1898) : *Samyutta-Nikāya of the Sutta-Piṭaka* (5 vols.), London.
- Foucher, A. 1905 : *L’Art Gréco-Bouddhique du Gandhāra*, I, Paris.
- 1918 : *L’Art Gréco-Bouddhique du Gandhāra*, II-1, Paris.

- Fussman, G. 1980 : “Documents Épigraphiques Kouchans (II)”, *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, 67, pp.45-58.
- 1988 : “Documents Épigraphiques Kouchans (V)”, *Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient*, 77, pp.5-26.
- Gnoli, R. (ed.) 1977-1978 : *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu* (2 vols.), Roma.
- Göbl, R. 1984 : *System und Chronologie der Münzprägung des Kuśānreiches*, Wien.
- Goswami, B. 2001 : *Lalitavistara: English Translation with Notes*, Kolkata.
- Härtel, H. 1985 : “The Concept of the Kapardin Buddha Type of Mathura”, J. Schotsmans/M. Taddei (eds.) *South Asian Archaeology 1983*, Naples, vol.2, pp.653-678.
- Huntington, J. C. 1984 : “The Iconography and Iconology of Maitreya Images in Gandhara”, *Journal of Central Asia*, VII, no.1, pp.133-178.
- Ingholt, H. 1957 : *Gandhāran Art in Pakistan*, New York.
- Khan, M. A. 1993 : *Gandhara Sculptures in the Swat Museum*, Saidu Sharif.
- Konow, S. 1969 (1929) : *Kharoshthī Inscriptions*, Varanasi.
- Luczanits, C. et al. (eds.) 2008 : *Gandhara: Das buddhistische Erbe Pakistans*, Bonn/Mainz.
- Lüders, H. 1961 : *Mathurā Inscriptions*, Göttingen.
- Marshall, J. 1951 : *Taxila* (3 vols.), Cambridge.
- 1960 : *The Buddhist Art of Gandhāra*, Cambridge.
- Nagao, G. M. 1981 : “The Bodhisattva Returns to This World”, L. S. Kawamura (ed.), *The Bodhisattva Doctrine in Buddhism*, Waterloo, pp.61-79.
- Pal, P. (ed.) 1988 : *A Pot-Pourri of Indian Art*, Bombay.
- Pal, P. 1988 : “A Pre-Kushan Buddha Image from Mathura”, P. Pal (ed.), 1988, pp.1-20.
- Parimoo, R. 2010 (1980) : *Life of Buddha in Indian Sculpture*, New Delhi.
- Pe, M. T. 1975 (1923-1931) : *The Path of Purity: Being a Translation of Buddhaghosa's Visuddhimagga*, London/Boston.
- Rhi, Ju-Hyung 1994 : “From Bodhisattva to Buddha: The Beginning of Iconic Representation in Buddhist Art”, *Artibus Asiae*, 54, no.3, pp.207-225.
- Rhys Davids, C. A. F. (ed.) 1975 (1920) : *The Visuddhi-Magga of Buddhaghosa*, London/Boston.
- Rosenfield, J. M. 1967 : *The Dynastic Arts of the Kushans*, Los Angeles.
- Sharma, G./J. Negi 1975 : “The Saka-Kushans in the Central Ganga Valley: Mainly

- a Review of New Data from Kausambi”, *Proceedings of the International Conference of the History, Archaeology and Culture of Central Asia in the Kushan Period*, II, Moscow, pp.15-41.
- Sharma, R. C. 1994 : *The Splendour of Mathurā Art and Museum*, New Delhi.
- Smith, H. (ed.) 1989-1997 (1916-1918) : *Sutta-Nipāta Commentary: Being Paramatthajotikā II* (3 vols.), Oxford.
- Strong, J. S. 2004 : *Relics of the Buddha*, Princeton/Oxford.
- Trenckner, V. (ed.) 1997 (1880) : *The Milindapañho*, Oxford.
- van Lohuizen-de Leeuw, J. E. 1949 : *The “Scythian” Period*, Leiden.
- 1981 : “New evidence with regard to the origin of the Buddha image”, H. Härtel (ed.) *South Asian Archaeology 1979*, Berlin, pp.377-400.
- Verardi, G. 1985 : “Avatāraṇa: a Notes on the Bodhisattva Image Dated in the Third Year of Kaniṣka in the Sārnāth Museum”, *East and West*, 35, pp.67-101.
- Vogel, J. P. 1930 : *La Sculpture de Mathurā*, Paris/Bruxelles.
- 1971 (1910) : *Archaeological Museum at Mathura*, Delhi/Varanasi.
- von Hinüber, O. 2008 : “The pedestal inscription of Śirika”, *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University*, XI, pp.31-35.
- von Mitterwallner, G. 1986 : *Kuṣāṇa Coins and Kuṣāṇa Sculptures from Mathurā*, Mathurā.
- Zwalf, W. 1996 : *A Catalogue of the Gandhāra Sculpture in the British Museum* (2 vols.), London.

図版出典

- 図1 田辺（編著）1992, 138, no.173
- 図2 左：Göbl, 79, Type 791-3；右：Cribb, 234, Fig.30.3, no.8（頭光は藤原の加筆）
- 図3 Bachhofer, pl.79 サールナート博物館蔵
- 図4 『祇園精舎』, 図版編, pl.294 インド博物館（コルカタ）蔵
- 図5 Pal (ed.), 8, Fig.9 キンベル美術館（米国フォートワース）蔵
- 図6 高田, 図版 63 マトゥラー博物館蔵
- 図7 Czuma, 57-58, no.7 ボストン美術館蔵
- 図8 東京国立博物館 2002b, No.5 ニューデリー国立博物館蔵
- 図9 Vogel 1930, pl.XXIII c マトゥラー博物館蔵
- 図10 van Lohuizen-de Leeuw 1981, Fig.20 マトゥラー博物館蔵
- 図11 Parimoo, 376, pl.14（部分）マトゥラー博物館蔵
- 図12 東京国立博物館 2002b, No.15（部分）マトゥラー博物館蔵
- 図13 ティッソ, 49, 写真 30 ニューデリー国立博物館蔵
- 図14 栗田, I, no.590 ギメ美術館蔵
- 図15 栗田, I, no.419 ペシャーワル博物館蔵
- 図16 栗田, I, no.418 日本個人蔵
- 図17 『ザールデリー』, 図版 175 パキスタン考古局事務所蔵
- 図18 Luczanits et al. (eds.), 106, no.45 スワート博物館蔵
- 図19 栗田, I, no.423 日本個人蔵
- 図20 Luczanits et al. (eds.), 322, no.214 スワート博物館蔵
- 図21 東京国立博物館 2002a, No.1 ペシャーワル博物館蔵
- 図22 Dar, 37, Fig.45 ラホール博物館蔵
- 図23 Dani, pl.no.12 ディール博物館蔵
- 図24 栗田, I, no.267 欧州個人蔵
- 図25 Foucher 1918, Frontispiece ラホール博物館蔵
- 図26 Behrendt 2007, 51, no.40 メトロポリタン美術館蔵
- 図27 Luczanits et al. (eds.), 271, no.191 ラホール博物館蔵
- 図28 Marshall 1960, pl.71, fig.102 タキシラ博物館蔵



図1 カニシュカI世金貨の仏立像



図2 カニシュカI世銅貨の弥勒ブツ坐像



図3 仏立像(マトゥラー)、サールナート出土、
h.248cm



図4 仏立像(マトゥラー)、
祇園精舎出土、h.223cm

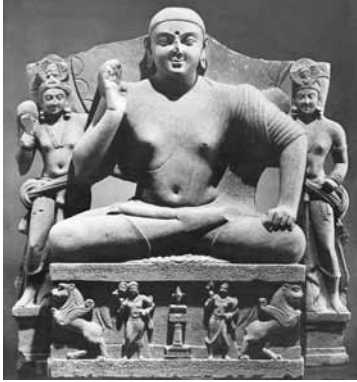


図5 仏坐像（マトゥラー）、
出土地不詳、h.93cm



図6 仏坐像（マトゥラー）、
カトラー出土、h.69cm



表

裏

図7 破風彫刻（マトゥラー）、
出土地不詳、h.76 × w.55cm

図8 破風彫刻（マトゥ
ラー）、出土地不詳、h.96
× w.11.5cm



表

裏



図9 欄楯柱浮彫（マトウラー）、
出土地不詳、h.74cm



図10 「従三十三天降下」（マトウラー）、
ガーヤトリ＝ティーラー出土、h.45cm



図11 「従三十三天降下」（マトウラー）、
ラージャガータ出土、h.30cm（部分）



図12 「従三十三天降下」（マトウラー）、ドゥ
ルヴ＝ティーラー出土、h.21cm（部分）



図 13 疑似破風（ガンダーラ）、
出土地不詳、寸法不明



図 14 疑似破風（ガンダーラ）、
出土地不詳、h.56cm

図 15 疑似破風「從三十三天
降下」（ガンダーラ）、出土地
不詳、h.58cm



図 16 疑似破風「從三十三天降下」
（ガンダーラ）、出土地不詳、h.28cm

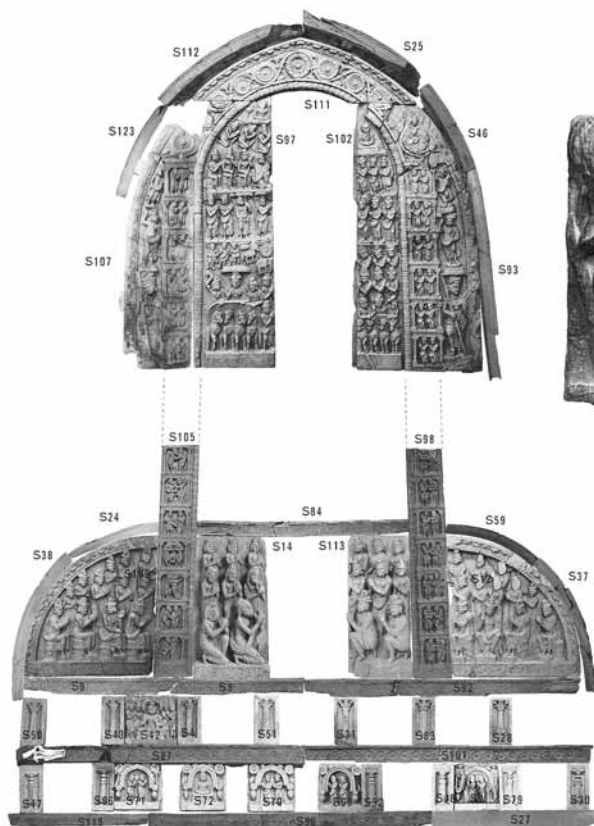


図17 破風彫刻「従三十三天降下」(ガンダーラ)、
ザールデリー出土、復元高4m 超



図19 「従三十三天降下」(ガンダーラ)、
出土地不詳、h.17cm



図18 「従三十三天降下」
(ガンダーラ)、プトカラ
(スワート) 出土、h.36cm



図20 聖遺物堂を描く浮彫
(ガンダーラ)、グムバトゥー
ナ(スワート) 出土、h.30cm



図21 仏立像（ガンダーラ）、おそらくシクリ出土、h.170cm



図22 仏頭（ガンダーラ）、シクリ出土、寸法不明



図23 仏坐像（ガンダーラ）、アンタン＝デリー（ディール）出土、h.44.5cm



図24 「梵天勧請」（ガンダーラ）、出土地不詳、h.47.5cm



図 25 仏立像（ガンダーラ）、
カラマール出土、h.110cm



図 26 仏立像（ガンダーラ）、
出土地不詳、h.51cm



図 27 弥勒坐像
（ガンダーラ）、カル
キ出土、h.70.5cm



図 28 弥勒礼拝図（ガンダーラ）、ダルマ
ラージカー（タキシラ）出土、h.22cm

The Return of the Buddha: On the Origins of the Buddha Images in Gandhāra

by Tatsuya FUJIWARA

The earliest buddha images of the Mathurā school (Figs.3-6) are designated by their inscriptions in two ways: *bodhisatvo* “bodhisattva” or *budha-pratimā* “buddha-image.” *Bodhisattva* means a buddha image in the terminology of the Mathurā school. The images were often established *cetiya-kutiyaṃ*, meaning “in the relic-shrine.” A Gandhāran inscription reads that “the relics of *Bhagavat* (the Buddha)” were established *bodhisatva-gahami*, meaning “in the bodhisattva-shrine.” In Gandhāra, the term *bodhisattva* might mean *caitya* “relics” in which buddha images might be embedded.

One of the oldest Gandhāran buddha images is that found on Kanishka coins (Fig.1), and a free-standing image best corresponding to it is Fig.21 which may come from Sikri. What the image is doing is known from the scenes in reliefs on gables and false gables which had been part of relic-shrines and of small stūpas enshrined in them. They describe “the descent from heaven (*Trāyastriṃśa*)” seen in Figs.15-17. In the scene, the Buddha, who has decided to descend and has tucked up his robe in order that it might not disturb his descent, stands on the upper side of the staircase which leads down to earth. The important difference between the depiction of this scene in the Gandhāran school from that of the Mathurā school is that the heavenly relics (especially the Buddha’s alms-bowl) invariably depicted in the latter (Figs.10-12) never appear in the former (Fig.15-17). According to Faxian who actually saw the alms-bowl in Gandhāra at the beginning of the 5th century, it had been there since the pre-Kushan age.

Therefore, at the same time and place the heavenly relics appeared in Gandhāra and were housed in the relic-shrines, the buddha images were born. They were created to explain those newly-arrived relics. The Buddha decided to descend from heaven (Fig.21), and as a result of his decision, the

relics descended to earth with him.

This theory of the birth of the buddha images is reflected in the later Mahāyānic doctrine formulated in Gandhāra around the beginning of the 5th century. According to this doctrine (Nagao 1981), the bodhisattva is one who is already a buddha and can enter *nirvāṇa*, but he decides upon *apraṭiṣṭhita-nirvāṇa*, meaning “not staying in *nirvāṇa*” and instead returns to this world for the salvation of all sentient beings. The Buddha returns to earth as a *bodhisattva*, the term meaning “a relic” or “a buddha image” in the older Gandhāran language.